

犬に教えられる愛情と愚かさ

眞鍋由比

今年の全校読書運動のテーマは「戦後70年」でした。17日発行の今年の松蔭女子学院報でも「戦後70年」が特集されています。貴重な写真が載っています。高校生なのに工場に働きに行かされていた「学徒動員」。ミッションスクールなのに校庭には天皇・皇后の写真が収められた「奉安殿」という建物があつた。体育祭の種目で毒ガスマスクを装着。皆さんが現在使っている校庭が戦時中、芋畑になっている写真。

本校の読書運動のなかでマイケル・ラモス先生が“Where the red fern grows”を推薦しておられました。そのときは日本語訳はないと思っていたのですが、絶版で、ありました！『ダンとアン』ウィルソン・ロールズ著 めるくまー (2002) です。神戸市立図書館の書庫にありました。

貧しい山小屋に暮らす少年ビリーは犬がほしくてなりません。ペットではなく自分で猟をして暮らしを楽にさせたいからです。10歳の自分も妹3人も学校に行ったことすらないのです。家に犬を買うお金もないと両親に断られ、2年、ひたすら釣り客に野菜を売ったり、釣り餌になるミミズやザリガニを買ってもらって広告に出ていた猟犬2匹の赤ちゃんの値段25ドルを貯めて買いに行きます。

街の人のこちらを馬鹿にするようなまなざしや態度、取り囲んで難癖をつけ、ケンカをしかける子どもたち、なにもかも気に入らないけど保安官だけは遠くまで犬を受け取り、山で野宿してはるか家に帰る勇気ある少年にやさしくしてくれました。

猟をするといっても、銃を使うわけではなく、犬をけしかけてアライグマを殺してその毛皮を取るのです。愛くるしいアライグマを殺すというのが正直、アニメのラスカルをみていた世代としては残酷な気がしてならないのですが、そうやって人間は他の動物の命を奪って生きている生き物なのです。ビリーは犬たちと猟をしていて、アライグマが登って隠れている木が邪魔になったから怒りに任せて切り倒してしまうのですが、そのあと悪いことをしたと素直に思います。この主人公は作者の少年期の生活をそのまま反映しています。犬同士の愛情、人間に対する忠誠心のようなものを素直に信じています。幽霊アライグマを賭けて猟にいったとき、尊敬の念すらおぼえて殺すのはいやだと拒否したりする純な少年…なんですが、この翻訳が全編「僕」ではなく「私」で話すのでどうしても10～13歳の少年とは思えず、ずっと違和感を感じていました。

この小説の原題Where the red fren growsですが、赤いシダが生える場所という意味です。最後まで読めばその秘密と少年の成長を理解するのですが、どうしてこれが「戦後70年」の推薦図書なのか。

吹雪の中、追い詰めたアライグマの木の下で待ち続けるダンとアンを見てカイルさんが言います「人間はな、はるか大昔から相棒である犬のことをわかってきた。だが、彼らのすることは人の想像を越えている。溺れている子供を救ったとか、主人のために命を捨てたとか、毎日のように新聞に書かれているよ。それを忠誠心と呼ぶ人もいる。わたしはそう思わんね。まちがっているかもしれんが、私なら愛と呼ぶ一混じりけのない最も深い愛だ、と。世界じゅうの人間が胸の中にそういう愛情を持てたらいいんだが。残念ながら人間にはむずかしい。それがあれば、戦争も殺しも、強欲も自分本位の考えかたもなくなるだろうにな。神が望んでいる世界ってのはそういうものだろう」